

4章 見えざる牙

(1)

北海道から戻った翌週の月曜日、雅人は下見の状況を媒体編集部の手塚部長に報告した。道内の列車状況や経由地のオプシオンなど、旅行に関する報告を聞くあいだ、手塚は満足そうにうなずいていたが、話が則尾のことにおよぶと「現地に残ったあ!？」と目をむき、不機嫌に顔をしかめた。

「則尾のやつ、北海道で女と待ち合わせてたんじゃねえのか？」

「現地を詳しくリサーチするってことでしたけど」

あわてて則尾を庇ったが、手塚は辟易（へきえき）とした面持ちで後頭部をぼりぼりと搔いた。

「則尾らしいっていえばそれまでだけどよ……それでいつ戻るんだ」

「二、三日ということでしたけど」

「三日としても、明日の火曜までか……とにかく今日中に連絡がなかったら大前から連絡して、あいつの状況を確認してみてください」

「わかりました」

「つたくよお。超過滞在分の経費は出さねえっていつておけ！」

「はい、きつくいつておきます」

「それから下見のレポートだけど、あした中には仕上げてくれよ」

《則尾さんのおかげで、こっちまでとぼっちりだ》

しかし雅人は内心を隠し、「はい」と神妙に頭を下げた。千歳空港での顛末（てんまつ）を話せない状況では、手塚の不機嫌を甘んじて受けざるをえない。

F T 課に戻った雅人はレポートの作成に没頭した。

ようやく大筋の内容がまとまったのは夜の九時に近い時刻だった。課員はすでに退社し、室内には雅人しか残っていない。パソコンの電源を切って背筋を伸ばしたとき、則尾のことが頭をよぎった。

《連絡してみようか》

携帯電話に手を伸ばしたが、首筋にたまった疲労感がその気力をそいだ。

《あしたでもいいや。それより早く帰って一杯やろう》

昨日の日曜は、下見の疲れで部屋から出る気になれず、留守録してあったドラマのDVDとカップ麺で過ごした。そのせいか一週間以上もご無沙汰している馴染みの小料理屋の地酒が妙に懐かしい。

雅人は携帯電話をバッグに放りこんで帰り支度を急いだ。

「あれまあ、お久しぶり！」

市川駅から歩いて数分の小路にある縄暖簾（のれん）をくぐると、店主（あると）の威勢のよい声が迎えた。二十坪ほどの店内には1組の客しかいない。夏のボーナス前ということもあるが、それでも雅人がこの街に越してきた二年前は、飲食以外の商店がシャッターをおろす時刻ともなれば、仕事帰りのサラリーマンや近所の商店主などの姿でこった返していたものである。しかし米国のサブプライムローン問題やそれに続くリーマンショックの影響で経済が冷え込んでからは、まるで潮目が変わったように客の寄りが鈍っている。雅人の定位置であ

るカウンター最深部のイスも、独身男の詫びしい指定席のように、いつも天板の下に収納されている。

そのイスを引っぱり出した雅人は、生ビールのジョッキを注文した。

「大前さん、先週はご無沙汰でしたね。忙しかったんですか？」

ポジティブを絵に描いたような店主も、不景気風の冷たさのせいか、心なし表情が冴えない。

「北海道に出張だね」

「羨ましいなあ、この季節の北海道はいいんでしょう」

「でも仕事だからねえ」

しばらくは当たり障りのないやりとりで席を温め、頃合いをみて好物のタラコのおにぎりと生海苔の味噌汁で腹の虫を鎮める。あとは黙っていても小鉢に盛られた肉ジャガと地酒の徳利がカウンターにおかれる。

客が少ないせいか話好きの店主は雅人にべったり張りつき、世間や世情を愚痴りはじめた。そして、年金問題や児童手当の方法がどーのこーの、はては中国やロシアとの領土問題まで、いっぱしの評論家と化して矢継ぎ早に自論を展開する。そのマシンガントークを適当にかわしながら、雅人は嘗めるように地酒の香りを味わった。

ちやうど一本目の徳利が空になったとき、足元のバッグで携帯電話が鳴った。

《誰だよ、こんな時間に》

舌打ちしながらディスプレイを確認した瞬間、脳裏に曙光が射した。まるで夢の世界からの甘い誘いのように『竹崎携帯』の文字が表示されていたからである。

反射的に咳払いをし、雅人は酔いを追い払った。

「はい、大前です」

腹に力を込め、声のトーンを下げて応える。しかし耳に飛びこんできた緊迫した声が、その気負いを跡形もなく粉碎した。

——大前さん！ 大変です！ 姉が……。

「え？ な、なだが、どうしたんですか？」

——襲われたんです！

「え？ 襲われたって……いつ？ どこで？ だれに？」

うわずった声でTPOの常套句を連発する。その狼狽ぶりを案じた店主が、「大前さんなんかあったの？」とカウンターに身を乗り出した。雅人はそれを手で制し、『ホテルの前です』という七海の声を聞きながら店の外へ走り出た。

「ホテルって札幌近江ランドですか？」

——ええ、そのエントランスの外で暴漢に襲われて……今日の夜七時頃です。

「そ、それで、お姉さんは？」

——はい、幸いにも意識を失っただけですが……でも……。

声がフェイドアウトする。

「竹崎さん！ 大丈夫ですか！？」

——はい、姉は大丈夫なんですけど……一緒にいた人が……。

「誰が一緒だったんですか？」

——北海道で大前さんと一緒だった旅行作家のかたと……。

「則尾さん!？」

——ええ……それともう一人……。

「福田さんも……」

膝が震えた。酔いは吹っ飛び、不吉な予感がみぞおちのあたりから湧きあがる。

「二人はどうなったんですか……?」

雅人は息を止め、七海の言葉に意識を集中した。

——姉からの連絡では命には別状はないそうですけど……。

思わず吐き出した緊張とともに、不吉な想像が夜気の喧騒に霧散した。

——お二人とも姉と同じ病院に運ばれ、手当てを受けているそうです。

「すみませんが、なにが起きたのか最初から教えてもらえますか?」

胸をなでおろした雅人は、改めて事態を確認した。

七海が姉の由布子から受けた緊急連絡によると、三時間ほど前の七時頃、札幌近江グラウンドのエントランスでタクシーから降りた三人に複数の暴漢が襲いかかったという。突然の襲撃に由布子は気を失い、抵抗した則尾と福田は、ホテルマンが警察に連絡を入れていくあいだに地面へ這いつくばってしまった。暴漢はすぐに逃げ去ったが、救急車で運ばれた病院の応急所見によると、則尾は骨折、福田は脳震盪のうしんとうということである。

事件の大筋を話し終えた七海は神妙な声に変わった。

——私は明日一番で現地に行きますけど、大前さんはどうされます?」

「オレは……」

脳裏に手塚部長のシブ面しぶおもてが立ちほだかる。

「仕事の予定が詰まっています……」

——わかりました。現地で詳しいことがわかりましたらまたご連絡します。

「はあ、よろしく願います」

雅人はジレンマの渦に喘ぎながら、誰もいない歩道に向かって深々と頭をさげた。

竹崎由布子の事件は深夜の情報番組でも扱われ、『旅行業界の麗人、暴漢に襲われる』『札幌の夜の怪奇、美人社長の奇禍』など、いかにも視聴者の気を引くタイトルで仰々しく報じられた。竹崎由布子の写真を右肩に配した画面では、レポーターが病院前から緊迫した口調で事件の状況を伝え、続いてモザイク処理のホテルマンがインタビューに応える。そのあとアナウンサーが、『一緒にいた2名の男性の一人は胸部骨折の重傷、もう一人は打撲による軽傷』と締めくくった。

インタビューに応じたホテルマンの話によると、暴漢の数は五、六名で、いずれもヘルメットとマスクをしていたようである。しかし由布子と同行していた二人の男性の抵抗にあい、蜘蛛の子を散らすように数台のバイクで逃げ去ったようである。

翌日、出社した雅人は真っ先に媒体編集部へ顔を出した。

手塚も昨夜の事件報道は知っていたが、竹崎由布子と同行していた男のうちの一人が則尾だと聞いて愕然と固まった。

「マジかよ!」

「はい、昨夜の連絡では」

「あいつは武道の学生チャンピオンだぜ。それが簡単にやられたのか? それになんであ

いつがS T Bの社長と一緒にいるんだ？」

「詳しい事情はわかりませんが暴漢は五、六人いたようです」

「こつちから連絡はできないのか？」

「入院していますから無理ですよ」

「ったく、あいつなにを考えてるんだ。でもよ大前、どうしたらいいと思う？」

「オレが現地に行つて状況を確認しましょうか？」

「北海道にかあ？」

目をむいた手塚は「そりゃあ無理だ」とにべもなく首を振った。

「それじゃあ、札幌支店の菅原支店長にお願いしてみましようか」

「その手があつたな！　すぐ連絡を取つてくれ！」

F T課に戻った雅人は札幌支店の菅原支店長に連絡を入れた。ご当地の事件であり、被害者が同じ業界の人間とあつて、札幌支店でも朝から話題になっていたようである。

その当事者が則尾と知つて菅原支店長も絶句した。

——まさか則尾さんとは……。

「それで菅原さんに病院まで状況確認に行つてもらいたいです」

——わかりました。病院の見当はつきますからすぐに行つてみます！

支店長は咳き込みながら了解した。そのやりとりを聞いた課員が慌てふためいて雅人のデスクを囲んだ。

「課長、則尾さん大丈夫なんですか？」

真つ先に美悠が口をひらいた。

「重傷といつても胸部骨折だから命に別状はないようだけ……」

「どうして則尾さんがS T Bの社長と一緒にいたんですか？」

「そんなことオレにもわからないよ」

「もしかして則尾さんって、スパイだったんですか？」

「スパイ？」

「S T Bに頼まれてウチの企画を盗もうとしたとか……」

「なにいつてるんだよ。今回の企画は彼が持ち込んだんだぜ」

「だからあ、思わせぶりに企画を持ち込んで、ウチの費用で下見をして、すぐに身を翻すつて。パターンですよ」

「そこまで考えるか」

雅人は美悠の逞しい想像力に呆れ、「そのうちはつきりするさ」とケリをつけた。

《竹崎由布子を襲つたのは長嶺会長を誘拐した連中かもしれない》

腑に落ちない表情の美悠から目をそらせたとき、そんな思いが唐突にひらめいた。

その日の昼過ぎ、思いがけず福田から連絡が入った。

ちようど外のレストランでランチを食べ終え、社に戻ろうと腰を浮かせたときである。

雅人は慌てて椅子に座り直し、恐る恐る携帯電話を耳にあてた。

——大前くんか？

福田の声は思っていたよりも落ち着いていた。雅人は周囲の耳を気にし、押し殺した声で応えた。

「福田さん……ですか？」

——ああ俺だ。事件のことは知ってるだろう？

「もちろんです。ゆうべ竹崎社長の妹さんから連絡がありましたし、夜のテレビニュースでも速報されました」

——俺たちの実名は伏せられていただろう？

「同行の男性2名って報道でしたけど、ケガは大丈夫なんですか？」

——俺なら大丈夫だよ。頭にケリを喰らって脳震盪を起こしたが、精密検査の結果ではたいたダメージはないようだ。今、病院の屋上からかけているんだが、警察やマスコミがうるさくてな。しばらくは病院にカンヅメ状態だ。

「則尾さんは胸部骨折の重傷って報道されていましたが、どうなんですか？」

——心配ない。アバラが一本折れただけだ。ついさっきも昼飯をお代わりしたあげく、早く退院させろって担当医にゴネていた。とはいっても痛みが治まるまでは病室とトイレぐらいしか動けないようだ。それであいつに代わって俺が連絡を入れたんだ。

「それを聞いてほっとしました。襲われたのはどんな状況だったんですか？」

——竹崎社長に誘われて市内のレストランで食事をして帰った矢先だ。ホテル前でタクシーを降りたとたんヘルメットをかぶったヤツらに襲われた。

「犯人の見当はついているんですか？」

——さっぱりわからん。ただし狙われたのが俺や則尾でないことだけはたしかだな。

「じゃあ襲われたのは竹崎社長ですか？」

——それしか考えられん。警察からもしつこく聞かれたが、俺たちには身に覚えがない。

「福田さんが絡んでいる裏社会の危ない連中の仕事ってことは考えられないんですか？」

——ははは、裏社会といってもジャーナリズムの世界だからな。あんなチンピラのような暴力沙汰はないよ。

「そうですね……それで竹崎社長は大丈夫だったんですか？」

——ああ、彼女に迫った二人を則尾が一気になぎ倒した。暴漢連中も則尾が武道の使い手だというのは想定外だったんだらう。あいつがいたおかげで彼女は無傷だった。きょうの午前中には退院してホテルへ戻ったようだ。

「もし暴漢の狙いが彼女だったとしたら、襲ったのは長嶺会長を誘拐した連中と関係があるんじゃないですか？」

——その可能性はあるが、俺の印象ではマフィアというよりチンピラって感じだった。

「そうですね。ところで二人の退院はいつごろになりそうですか？」

——そうそう、電話を入れたのはその件だ。

福田はふいに声のトーンを下げた。

——俺は数日で退院許可が出ると思うが、則尾に関してはなんともいえない。下手をすればギブスが取れるまで入院ってことになるかもしれない。それで則尾から伝言されたんだが……大前さんと伊豆に行く件だ。

「篠海の確認ですね」

——その件だ。則尾の話では、今週の週末あたりに行くはずだったんだらう？

「その予定でしたけど、則尾さんが退院して東京に戻るまでは延期ですよね？」

——いや……。

福田は一瞬、言葉をためらったが、すぐに神妙な声でいった。

——あいつは少しでも早く確認したいようだ。ただしこんな事件があっただけに、伊豆行きについても、危険性を覚悟する必要がある。

「オレ、どうしたらいいんですか？」

——則尾は予定通り今週の土日で大前くんに行ってもらいたいらしい。ただし単独では危険だからキミの会社にいる則尾の友人に事情を話して、同行を頼むようにということだ。それと、現場に行っても遠目に確認するだけで、それ以上は踏みこむなと警告していた。

「そうですか。わかりました」

——大前くん、則尾の忠告を忘れるな。場合によっては命に関わるぞ。

「わかっています」

電話を切った雅人の心境は複雑だった。福田を介した則尾の警告の背後に七海の妖艶な笑みがちらちらと現れていたからである。『篠海』という推理が正鵠を射ているとすれば、札幌での暴漢事件と考えあわせ、則尾の警告にも一理ある。しかし単に確認するだけの行為がそのまま深刻な状況へ直結するとも思えない。

雅人の心には七海と二人で行けるかもしれないという邪な想像が膨らんでいた。この千載一遇のチャンスをも、手塚のヒゲ面でフイにするなど神への冒瀆にも等しい。

《彼女に連絡して、もし都合がつかないようだったら延期だな》

手前勝手に決着してはみたものの、則尾への疚しさが重い碇となつて意識を繋留している。雅人は碇の鎖をえいっとばかりに巻きあげながら七海の携帯をコールしてみた。

——はい。

予想に反し、張りのある声が応えた。雅人の心で、鎖を巻きあげる速度が加速した。

「大前です。電話して大丈夫ですか」

——ちようどこちらからかけようと思つていたところですよ。先ほどまで姉の部屋にいましたが、食事をとろうと思つて下のレストランに来たんです。

「札幌へは何時ごろ着いたんですか？」

——九時過ぎです。姉が十時前には退院してホテルへ戻ると聞いていましたから、そのままホテルで姉を待ちました。

「お姉さんの状態は？」

——ショックだったようです。でも同行したお二人に助けられたということで感謝していました。

「警察の事情聴取はどうですか？」

——姉と一緒にホテルの部屋へ刑事が来て、三十分ぐらい……。

「警察は長嶺会長の誘拐事件との関連はにおわせていましたか？」

——いえ、それに関しては姉も話していませんから。

「でも遠からずバレますよ」

——そうですね。でも、そうなったとしても姉の証言は変わらないと思います。悄然といった七海は、重苦しい空気を振り払うように明るいついで聞いてきた。

——ところで篠海に行く予定ですけど、どうになりました？

ふいに核心を突かれ、雅人はうろたえてしまった。

「それが……一緒に行くはずだった則尾さんがしばらくは退院できそうもないので……で

も、さつきももう一人の福田さんって人から則尾さんの伝言があつて、則尾さんはオレに予定通り現地へ行ってもらいたいということなんですけど……」

意を含み、おずおずという雅人に、七海の意外な言葉が聞こえた。

——それでしたら今週の土曜にしません？

「え！？ 土曜日？」

——はい。大前さんのご都合は？

「オレはOKですけど、竹崎さんはそれまでに東京へ戻れるんですか？」

——姉はもう心配ないと思いますので明日には戻るつもりです。

「でも二人だけだと危険じゃないですか？」

——あら、どうして？

「こんな事件があつたから、則尾さんも単独行動を危惧してました」

——でも単独じゃありませんわ。

「まあ、そうですね」

——万一のとき、守つてはいただけないのかしら。

その言葉が、姉を守つた則尾との対比に聞こえ、雅人は奮然とした。

「とんでもない！ 命に代えても守りますよ！」

——だったら私も安心です。

「それは保証しますけど」

——二人ではいけません？

媚びるような七海の表情がリアルに浮かび、BMWの車内で感じた芳香が鼻腔によみがえる。すでに雅人の意識を繋留する疚しさの礎はすっかり巻きあげられ、七海と二人の伊豆行きが煌めく水平線となつて視界に広がっている。

雅人は傲然と出航の銅鑼を鳴らした。

「わかりました。行きましょう！ なにが起きてもオレが守ります！」

——当日の交通手段は？

「あ、そうですね。じゃあオレ、レンタカーを用意します」

慌てる雅人に、七海は含み笑いをもらした。

——私の車で行きませんか？ そちらまではお迎えに参りますが、そこからは大前さんに運転をお願いしてもいいかしら？

「もちろんしますよ。それじゃあ出発は何時ごろにしましょうか？」

——午前十時ごろでは、早いかしら？

「大丈夫です！」

——それでは十時にそちらに参ります。

「お待ちしています！」

電話を切つた雅人は席を立つのも忘れて七海の言葉をかみしめた。

《幸運つてのは重なるもんだな》

そう思つたとき、則尾の奇禍を僥倖にすり替えた自分への後ろめたさが、チクつと心に刺さつた。

それから週末までの三日間、雅人は新たな北海道プランの仕上げに追われた。

販売マニュアル制作や媒体編集部との打合せ、さらにはパフレットの広告主へ営業部員

と同行するなど、追いかみ作業に忙殺された。

則尾や福田からはなんの連絡もない。

札幌支店長からの報告で、則尾はいたって元気だが、胸と腕をギブスで固定され、しばらくは動けないことを知った。その報告を手塚部長に伝えると、「今月中に紀行文の原稿があがらねえとまずいぜ。来週になったら強制的に東京へ連行だな」と気色ばんだが、伊豆行きに関する同行依頼は入っていない様子で、それ以上は則尾の話題を持ち出さなかった。ただ、打ち合わせなどで手塚と顔を合わせるたび、雅人の心では、則尾の警告を無視する疚しさと、週末の秘めたる野望が葛藤した。軍配はすでに決しているが、うしろめたさは絶えず野望の影となつてつきまとっている。

札幌の事件は、被害状況がそれほど深刻でないためか、あるいは揺れ動く経済情勢や政局の報道に追いやられてか、事件当日の報道以後はニュース番組に登場しなくなった。

(2)

土曜日の朝、雅人は十時前にマンション前の小路で七海の到着を待った。空は花曇で、雨の心配はなさそうである。

すぐに白いBMWが現われ、雅人の脇へ停まった。

「おはようございます!」

あいさつしながら車を降りた七海を見て、雅人は自分の服装を悔いた。

上品な刺繍が入った白っぽいTシャツにタイトなジーンズを履き、やや濃い目のサンダラスをかけた七海は、まるでファッション誌から脱け出たような、都会的な色香を放散している。ベージュのストラックスに柄シャツという自分の姿とはまるでつりあわない。

「あとをお願いしますね」

雅人の焦りをよそに、運転席からおりた七海は、さつさと助手席に乗りこんだ。

車内にはあの芳香が漂っている。運転席に座った雅人は気を鎮めようとシートやルームミラーをあれこれ調整してから、おもむろにキーに手を伸ばした。

「あれ?」

ハンドルの周辺にキーが見あたらない。そのとき、エンジンの心地よい振動音とともにカーナビが作動した。

「カーナビもセットしておきました」

戸惑う雅人に七海がキーのようなものを差し出す。

《なるほどキーレスエントリーってわけか。こりゃあ最初からやられたな》

雅人は苦笑いを返し、ギヤをドライブレンジに入れた。

カーナビは、首都高速・東名高速・小田原厚木道路と車を導き、熱海あたまから先は伊豆スカイラインへと誘導した。その間、緊張してハンドル握る雅人に、七海は積極的に話題を提示してくれた。

話題といっても、ほとんどが七海からの問いかけだったが、雅人は問われるままに学生時代のことや自分の旅への想い、さらには今回の事件に関連し、則尾のことや福田のことなどを話した。雅人からも七海の学生時代のことなどを聞いてはみたが、彼女は自らのこととはあまり語らず、美悠の話へと巧たくみに誘導し、美悠の卒業時にSTBへ勧誘したという話題にすり替えた。

「彼女、しっかりしてますよ。ウチに来てほしかったわ」

雅人の反応を試すように、七海はリクルーティング時の遺恨を仄めかす。

「オレも彼女の能力には助けられていますよ」

「でしょう？ 大切にしてくださいね」

「え？ ええ……もちろんですよ。ウチの重要な戦力ですから」

「戦力ってだけですか？」

七海の心が読めず、雅人は返答に窮した。

「まあ、そうですね……」

こんな調子で七海にリードされて三時間、伊豆スカイラインの終点から大室山おおむろの脇を抜け、城ヶ崎海岸に着いたのは午後一時の少し前だった。

「食事はどうしますか？」

駐車場に車を停めた雅人は、七海の顔をうかがった。

城ヶ崎海岸は、かつて活火山だった大室山の噴出マグマによって形成された断崖絶壁のリアス式海岸である。その延長距離は十数kmにも及び、東伊豆海岸きつての景勝地として人気が高い。夏の観光シーズンにはまだ間があるものの、週末の駐車場はほぼ半分ほどが観光客の車でうまっていた。

七海は明るい表情で振り返った。

「とりあえず目的の場所に行ってみませんか？ 食事はそのあとでゆっくりしましょう」

「そうですね。そうしましょう」

車から降りた二人は、駐車場の脇ある観光用の地図看板で目的の場所を確認した。駐車場から数百メートル離れた伊豆海洋公園の方角にあるトイレマークに『篠海せつちんの青椿堂』と示されている。

「ここですね」と雅人がそのポイントを指で示したとき、七海がつぶやいた。

「このトイレの名前、みんな面白いネーミングだね」

なるほどトイレマークには『磯の和香家』『いがいがの静落庵』などユニークな名がつけられている。

雅人は少し考え、

「これもなにかの暗号ですかね。まあどんな暗号にしてもですね……」

「そういいかけたとき、七海が「どうでしょうか……」と首をかしげた。

雅人は、「トイレだけにウンがつきそうですね」というダジャレをのみこみ、「行きましよう」と声をかけた。

城ヶ崎海岸の遊歩道には、思っていたよりも多くの観光客がいた。

《これだけの人目があれば急に襲われることなんかないだろう》

それまで抱いていた恐怖感や緊張感が薄らぎ、七海と二人でオリエンテーリングを楽しむような気分があふれてきた。

空は花曇りで直射日光はそれほど強くはない。しかし全身に絡みつく海風の熱気と湿気が首もとや背筋に汗を滲ませる。その風に乗って、断崖で碎ける波音とともに、横を歩く七海から南国の花を想わせる香りがほんのりと漂ってくる。潮のにおいに混じる芳香は、つい先ほどまで車中に満ちていたときよりずっと扇情的に感じられた。

目のやり場に窮した雅人は意識して前を向き、黙々と歩いた。

やがて目指す建物が現れた。

「あれですね」

和風の庭園にぼつんと添えられた茶室のような建物である。遊歩道から建物に続く小道には石畳が敷かれ、その両脇は整然と刈り込まれた藪椿の木に覆われている。

雅人は注意深く周囲をうかがった。遊歩道にはまばらな観光客の姿がある。その平和な光景に雅人は安堵した。

「あのシノウミのメッセージがこの建物を指しているとしたら、内部になにかが隠されているのかな？」

「どうでしょうか……」

あまりの平穏さに、七海も当惑しているようである。

「とにかく調べてみましょう」

さしたる緊張感も抱かず、それぞれ男性用と女性用に分かれて内部に入った。雅人が入った男性用の内部はやや和風の雰囲気はあるものの、通常のトイレとなら変わるところはない。幸いにも他の利用者の姿はなく、内部は静まり返っていた。

雅人は小用便器の周辺をざっと見たあと、大使用の扉をあけて内部をうかがった。しかし、そこも平凡な便器があるばかりで、特別に意味を含んだ空間には感じられない。再び小用便器の周辺を注意深く見たが、どう考えてもメッセージ性がある空間とは思えない。拍子抜けして建物を出ると、先に出ていた七海が「どうでした？」と聞いてきた。

「別に変わったところはありません。普通のトイレですよ。そっちはどうでした？」

「こつちも別に変わったところはありませんでした。もしかしたら内部じゃなくて外になにかがあるのでしょうか？」

建物の背後には藪が密集し、やや陰湿な雰囲気漂っている。

「とりえず見てみましょう。オレが行ってきます」

雅人はトイレの背後の藪に足を踏み入れ、蜘蛛の巣を腕で払いながら建物を半周した。

「背後にも変わったところはありませんね」

「じゃあ次は灯明台ですね」

「そつちに期待しましょう」

名ごり惜しい気分ですり歩き、遊歩道まで出たときである。

背後から「すみませんが」と声がした。驚いて振り返ると三十年配のカップルが神妙な表情で近づいて来た。

「あなたがた、あの建物の周りを調べていましたね」

髪を律儀に七三分けにした銀行員のような風体の男が、雅人に鋭い視線を注ぐ。

「え？ そんなことないですよ」

思わず否定したとき、斜め背後から新たな人影が迫った。先の二人よりやや年配の目つきが悪い男だった。その男が雅人の脇に忍び寄ったとき、七海がすがるように腕をつかんだ。とっさに後ろ手で七海の体を庇いながら、雅人は目一杯虚勢を張った。

「あなたたちは誰ですか？」

その言葉を無言で受け流した男は、おもむろに身分証を示した。

「警察ですが協力していただけますか？」

「なんの協力ですか？」

「あの建物をお調べになつていたようですが、なにか理由があつたんですか？」

「調べていたわけじゃありませんよ」

「なにをされていたんですか？」

「なにつて……用を足していたんですよ」

それを聞いた年配男は、辟易としたように口をゆがめた。

「とにかくお聞きしたいことがありますので、あちらまでご同行願います」

《ごいつら本当に警察官か？》

三人の姿が、札幌の事件の暴漢と重なり、不信と不安が膨れあがる。

「あつちつて……どこまで行けばいいんですか？」

「着いて来ていただければ、わかりますよ」

年配男の目に凶暴な光が射したとき、遊歩道の先から観光客らしき中年女性が四人、ボ

ソボソと話しながら歩いてきた。雅人は第三者の出現に力を得て年配男の視線に抗あがった。

「行かないといたら、どうします？」

「しかるべき手段をとらねばなりません」

「強制連行つてわけですか？」

「公務執行妨害罪になりますか、それでもいいんですか？」

「どうして……」

雅人が男から顔を背けたとき、七海が毅然とした声を発した。

「あなたがたは警視庁の所属ですか、それとも静岡県警の所属ですか？」

三人の目が七海に注がれる。次の瞬間、真ん中の女性が敵意を露あらわにして七海を睨にらんだ。

「なぜ、そんなことお聞きになるの？」

「本当の警察なら所属を隠す必要はありませんわよね」

七海も負けていない。雅人は再び後ろに手をまわして七海を庇かばった。脇を通り過ぎた四人の観光客が、サングラス姿の七海に好奇のまなざしを送り、「なんかの撮影かしら」などと囁ささやきあつている。

七海は雅人の手をおしのけ、女性に詰め寄った。

「鉄道警察隊の田所警部、ご存知？」

三人の顔に戸惑いが走る。

「どうしてその名前を？」

年配の男が目尻を下げて七海をのぞきこんだ。

「ご存知なんですね。それでしたら田所警部に連絡して竹崎七海という名前を確認してみてください。それができればあなたがたを警察官だと信じます」

「確認もなにも……田所警部はすぐあちらにおられます」

年配男は呆気にとられた顔で応えた。

「いらつしやるんですか？ それなら私たちも一緒に参りますわ」

なんのことはない、カシオペア事件を担当する鉄道警察隊も『シノウミ』のアナグラムに気づき、密かにこの場所を監視していたようである。

事前連絡を受けた田所警部は、伊豆海洋公園の管理室で二人を迎えた。

「竹崎さん、本日はどのようなご用で？」

バツが悪そうに白髪まじりの頭をかいた。

「たぶん警部さんたちと同じですわ」

七海は少しもひるまず、毅然と応えた。鼻で笑った警部は、「まあどうぞ」と椅子を勧め、

「同じといえますと?」

「シノウミという言葉の解釈です。警察も私たちと同じように、篠海の青椿堂や灯明台に着目されたんでしょう? いつから監視していらっしゃるんですか?」

「いつからといわれてもねえ」

「なにか成果はございました?」

警部の表情が陰しくなった。

「そんなことより、民間人にこんなことされては困るんですよ。捜査にも支障します」

「あら、私たちは旅行代理店の人間ですよ。仕事で観光地の調査をしていただけですわ」

七海の抵抗に警部はゲジゲジ眉をハの字にゆがめ、ギョロ目を細めて溜息をついた。

「竹崎さん、そんな体裁はやめましょう。これはあなたも関係した事件の捜査ですよ」

その表情につられ、七海の横顔に笑みが浮かぶ。

「私たちも確証があつたわけではありません。ですから不確実な情報で警察の手を煩わせるのもためらわれたものですから」

「こういうことはまず我々にいつていただかないと。ほれ、あなたのお姉さんが襲われた札幌の事件、あんなこともありますのでね」

どうやら竹崎由布子の襲撃事件が、カシオペア事件の捜査に影響しているようである。

雅人は二人のやりとりに割って入った。

「警察は、札幌の事件とカシオペアの事件の関連性を疑っているんですか?」

すると警部は眉間のシワをぐっと深めた。

「捜査の内容はお答えできません。いずれ正式発表がありますから、それでご判断ください。それと、今後このような行動は謹んでください。なにか思いついたことがありますら、まず自分に連絡してください。とりあえずきようはお引取りいただいて結構です」

「わかりました。お手数をおかけしました。じゃあ竹崎さん、行きましょう」

そういつて雅人が立ちあがったとき、「竹崎さん」と警部の声が追いつがった。

「ほかに隠していることはありませんね?」

一瞬、七海の視線が揺れる。しかし彼女はすぐに平然と返した。

「ありませんわ」

「そうですね。それならけっこうです」

無然といった警部は、入り口近くの椅子で待機していた女性警官に「お送りして」と顎で命令した。

(3)

「警察も気づいていたんですね」

エンジンを受けた雅人は、助手席で暗然とうつぶす七海に声をかけた。

「ええ、警察も手をこまねいていたのではなかったのね」

「でも成果はないみたいだったから、篠海のアナグラムは見当はずれだったんですかね」

「まだわかりませんわ。警察の監視は姉の事件が起きてからのようすし……」

「それでも一週間近くあめしているわけでしょう？ 少なくともこれまではなんの発見もないってことですよ。それより竹崎さん、おなかは減っていませんか？」

伏せ目だった七海が可笑しそうに笑んだ。

「そうですね。お昼もまだですものね」

「帰りは海沿いの国道を走って適当な店を探しましょう！」

雅人は意識して陽気にいい、車を発進させた。

城ヶ崎海岸から熱海へ向かう国道135号線は、途中に川奈かわなや伊東いとうなどの老舗温泉地や海水浴場が点在し、シーズンの土日ともなれば行楽客の車がひしめく道である。しかし梅雨を控えた六月の中旬、安穏と輝く相模湾を望む午後の国道は交通量も少なく、首都圏の大観光地といったイメージとはほど遠い、寂れた海浜リゾートの風情が漂っている。

やがて雅人は高台にあるレストランに車を入れた。ランチの時刻を過ぎた店内は閑散としており、海を一望する特等席に案内された。

「竹崎さん、今日はお疲れさまでした」

水のグラスを掲げた雅人は乾杯のポーズをした。

「大前さんこそお疲れさまでした。本当に意外な展開でしたわね」

七海もグラスを掲げる。

「面白い経験でしたよ。それより竹崎さんがあんなにしっかりしているとはねえ。これじやあ暴漢に出くわしても助けられるのはオレのほうかもしれないね」

「あら、そんなことはありません。内心はビクビクでした。でも乾杯できるような成果はありませんでしたわね」

「いやあ、竹崎さんの逆襲に警察もタジタジでしたから、今回は竹崎さんの勝ち。つまりは警察の完敗ってわけです」

「あら、乾杯のシヤレ？ へえ、大前さんもオヤジギャクをいうんですね。でも本心はアルコールで乾杯したいんじゃないですか？」

「アルコールは嫌いじゃありませんけど運転がありますからね。竹崎さんを送り届けたら、部屋でゆっくりやりますよ」

「それでしたら市川へ直接行ってください。そこからは自分で運転しますから」

「そんなわけにはいきませんよ。竹崎さんを送り届けてから電車で帰ります。ところで竹崎さんのお住まいはどちらなんですか？」

グラスを口に運びかけた七海の手がとまる。

《やばいこと聞いたかな》

目を伏せた七海を、雅人は神妙に見つめた。すると、ゆっくりとグラスを戻し。顔を上げた七海の目に、怪しい光が浮かんだ。

「大前さん、よろしかったら私の部屋でもう一度乾杯しません？」

「えー？」

「私、ワインに凝っているんです。モゼル産のおいしい白ワインがありますから、今日のお礼にご馳走しますわ」

「い、いいんですか？ そりゃあ感激だなあ」

「ええ、大前さんを信頼していますから」

それが七海の本意なのか、それとも形式的なガードなのか、瞬時には測りかねた。しか

し雅人の心は、ウインドーの向こうに広がる相模湾の水平線を越え、夢の世界へと飛翔していった。

七海の住まいは渋谷区の猿楽町の一角、瀟洒なマンションの一室だった。二十畳以上ありそうな広いリビングに振り分けの個室がついた2LDKで、渋谷駅へも徒歩圏内の一等地である。

「高そうな部屋ですね」

思わずもらした下世話な感想に、七海は「え？」と戸惑いを浮かべたが、雅人をソファーへと促しながら「姉のモノなんです」と乾いた声でいった。

「お姉さんが所有しているんですか？」

「ええ、個人所有のマンションですけど、会社が社宅扱いにしていますから家賃はほとんどかかりません」

「羨ましいなあ。オレなんか狭いILDKですからね」

「あら、独身ならそのほうが気楽でいいわ。一人でこの部屋は、使いきれませんもの」

笑顔を取り繕った七海は「ちよっとすみません」と残り、ソファの背後の個室へと姿を消した。

《あっちが寝室なのか》

長いソファの端に座った雅人は、七海が消えた扉の奥を想像しながら、広いリビングを見まわした。

ソファの正面には大型の薄型テレビが据えられ、その両脇を囲むガラス製のシンプルな棚には、ハイテクなデザインの時計、電話機、照明器具などがさりげなく置かれている。個室との仕切り壁には、白い物入れが配されているが、なにが入っているのかはわからない。ただ物入れの上には外国製らしい人形が四体ならび、そのあたりだけが女性の居住まいらしい空気に包まれている。

来客を意識してか、リビングには生活を感じさせないように見あたらさない。ただしワインに凝っているという言葉を裏づけるように、キッチンとの間仕切り部分に、中型の冷蔵庫ほどもあるワインセラーがあり、ボトルがぎっしりならんでいた。

ゆったりしたブラウスに着替えた七海は、そのワインセラーから一本を抜き取り、雅人とは反対側の端に座った。

勧められた白ワインは、アルコールを感じさせない透明な香りと引き締まった舌触りがあった。香りが鼻に抜ける瞬間、ほのかな甘みが舌を伝わるが、あとは香りの余韻のなかに深く消えていく。

乾杯のあと、七海は冷蔵庫から大きな包装袋をいくつか取り出し、テーブルに広げた。包装の中身は一斤の丸いライ麦パンとブロックのチーズ、そしてローストビーフだった。七海はこれらの食材を薄っぺらな樹脂製のマナ板の上でスライスした。

「ライ麦パンのサンドイッチですか？」

「ええ、この白ワインはお肉にも合うんですよ」

七海は食材を重ねたサンドイッチをひとくちサイズに切り分けた。

なるほど、厚めに切った肉とチーズを挟んだライ麦パンのサンドイッチは、白ワインの香りとしつくり溶け合い、その旨さが倍増する。

飲みながら、食べながら、七海は巧に雅人の話をねだった。

酔いも手伝ってか、雅人は次第に饒舌になる自分を自覚できないまま語った。ただ、二年前の離婚のことに話がおよんだときは、さすがに《しゃべり過ぎかな》と冷やかな焦りが脳裏をよぎったが、その場の勢いに身を任せ、仕事で家に戻れなかった自分と相手との生活時間のズレや、そのあげくの醜い葛藤の日々を、つい話してしまった。

七海は、意識してか、仕事のことや個人的な話題には触れなかった。しかし雅人が七海の出身地を聞いたとき、暗澹あんたんと顔を伏せ、躊躇ためらいがちに自らを語った。

七海が生まれたのは三重県の鳥羽市である。しかし中学性ちゅうがくせいのときに両親が亡くなり、それ以後は東京にいる姉の手で育てられたという。両親が突然の交通事故で亡くなったとき、すでに東京で勤めていた姉の由布子は、都心に購入したマンションに妹を引き取り、高校・大学と生活の面倒をすべてみてくれた。

当時、姉の由布子はまだ二十代の前半である。いくら大手の四季観光産業に勤めていようと、都内にマンションを買い、妹を私立の大学に入れるほどの収入があったとは思えない。七海は実家の家屋敷を売り払ったお金で賄まかなったというが、雅人は、業界の麗人として名を馳せる竹崎由布子の背後に、四季観光産業の会長・長嶺善季の影を見てしまう。

結局、二本のワインをあけるのに一時間、期待していたような艶事もなく、雅人は帰途についた。

別れぎわ、アルコールで薄紅色に目を潤ませた七海が「今日は、ありがとうございました」と右手を差し出したとき、《このまま抱きしめたら》という衝動が走った。しかし業界の倫理を犯す大罪の予感が、その衝動に冷水を浴びせ、雅人はかろうじて自分を制した。複雑な気持を抱えたまま渋谷駅まで夜の街を歩く。

渋谷駅は若者に占領されていた。時刻は既に十時をまわっているが、週末の夜を楽しむ若者にはまだ宵の口である。十数年前まで、雅人もその一角にいた。しかしそのころに比べると男も女もファッションへの気遣いや力の入れようが違う。

大学生の雅人がこの街を闊歩していたころ、世の中はバブル崩壊の余波に揺れていた。企業倒産が相次ぎ、若者は就職氷河期に凍え、厭世的な空気が蔓延していた。この街にも化け物みたいな女子高校生がウヨウヨし、さながら世情の憂さを晴らす掃きだめの様相さえ帯びていた。

しかし昨今の若者は格段にセンスがよくなり、上品になっている。

変わらないのは、アスファルトの歩道から立ちのぼる饅かえた臭いと構内に充満する青臭い人いきれだけである。ただし、それすらも上品な若者を染めあげる力はない。彼らは、まるで観光地に群れ寄る旅人のように、渋谷と名がついた空間を楽しみ、去っていく。

雅人はJR山手線で代々木まで行った。渋谷からひとつ目の原宿駅ではカラフルな人波がどつと乗り込み、華やかで幼い喧騒が車内に蔓延する。しかし代々木駅で乗り換えた総武線には、疲れたサラリーマンの異臭が漂っていた。土曜だというのに不況に喘ぐ企業戦士には一時の休息も許されないようである。

《離婚する前の自分もこんな状態だったなあ》

雅人は数年前の自分を想った。

酔いに任せて七海に話してしまったが、旅行業界の厳しい実情を知らない女には……この将来の夢を、平穏で幸せな家庭にのみに描いている女性には、過当競争に生き残りを

かける業界のシビアさなど理解できるはずがない。

子供はまだ早いという雅人の慎重さも、己の夢にフタをする疎ましい男のわがままとしか映らなかつたのだろう。

それにくらべ、同じ業界の第一線にいる七海には、どこかに肌で理解し合える共鳴感のよなものがある。

ドアの脇に立ち、流れる都会の夜景を見ながら、雅人は、競合会社の役職との関係を正当化する理由をあれこれ考えた。しかしどう考えてもビジネス倫理を正当化する理由は見つからない。逆にそのことが七海との関係をスリリングな快感へと導くのもかもしれない。

《こりゃあ覚悟がいるな》

七海の華奢かしゃな手の感触を思い起こし、雅人は疼いたくような破戒はかいの予感を抱いた。